

親鸞仏教センター通信

2004.
September

2004年9月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第11号

清沢満之を問う意味

親鸞仏教センター研究員 櫻井智浩

このたび、親鸞仏教センターから研究誌『現代と親鸞』の特別号(第6号 2004年9月1日号)として、「清沢満之特集号」を刊行する運びとなった。近年、清沢満之関連の出版は、ますます盛んである。このような状況のなか、あえて親鸞仏教センターから「清沢満之特集」を世に問う、その意義はどこにあるのか。思うに、それは、清沢の思想の現代的意味をあらためて捉え直し、そのうえで、われわれと清沢の関係をもう一度問い直すということである。

清沢満之を評して、「近代の仏教者」(『評伝 清沢満之』脇本平也)という指摘がある。「近代」と、前近代的な香りをもつ「仏教」との間には、すでに断絶があり、対立するかの様なイメージがある。しかし、清沢は西洋哲学を学ぶというかたちで、「近代」という時代状況を真摯に受けとめ、その人生に「迷悶」しつつ親鸞の精神に問い、「自己とは他なし 絶対無限の妙用に乗托して 任運に法爾に此の境遇に落在せるもの 即ち是なり」(『臘扇記』)という言葉に代表されるような、信念の確立に至ったのである。その道程を捉えるとき、彼の「迷悶」は、信念の確立のうえでの大切な土壌として見直されてくる。

このような視点で、もう一度、清沢の生涯と思想に向かい合うとき、彼を生涯突き動かしてきたものは、「自己とは何ぞや」と問わずにおれない人間の根本の問いであったことがあらためて知られる。「清沢満之特集号」を通読すると、その受けとめ方には識者それぞれの真摯な肉迫を感じる。その意味するところは、清沢満之に学び、それを語るということが、かえって学ぶ人自身の姿勢、生き方を照らし出してくるということではないか。清沢に学ぶ者は、人間を人間たらしめ、いまの私を突き動かしているものは何かという問いに逢着せざるを得ない。なぜならその問いは、清沢のみならず、仏教に学ぶ者の課題であったからだ。彼の場合、それを「哲学」というかたちで、まずは表現したのである。

われわれもまた、「現代」という時代状況のなかで、それぞれ固有の「迷悶」を抱えている。それを忌避するのではなく、まずは受けとめていく。そういう、自身のあり方を問い直す契機として、清沢の学問内容が息を吹き返すことを願う。「清沢満之特集号」が、その一助となれば幸いである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」 信ずるということは、^{まなこ}眼の転換

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第26回から第28回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。天親菩薩の『浄土論』を参照しつつ、第26回は「大乘」という課題について、第27回は「一切所求満足功德」について、第28回は「故我願生彼 阿弥陀仏国（かるがゆえに我、願わくは、かの阿弥陀仏国に生まれん）」という言葉について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、その第27回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

■ 信心という問題

『浄土論』に、「衆生^{しゅじょう}所願^{しよがん} 楽^{らく} 一切能満足^{いつさいのうまんぞく}」（衆生の願楽するところ、一切よく満足す）とあって、「一切所求満足功德」と呼ばれています。「願」も「楽」も願うことで、衆生が願う一切が満足する場所が浄土であると。実際には、われわれは、全然満足していないではないかと。絶対満足などあるはずがないと思っている、欲の骨頂であるような人間に、「一切所求満足」などと言っても、そんな話は虚偽だと。あるいは、理想の話などしたってしょうがない、もうちょっと身近な話を、というふうにしが見えないでしょう。

曇鸞は、「称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかん」（『浄土論註』）という問いを出しています。無碍光如来、阿弥陀仏の名を称えても、相変わらず自分自身は無明^{みよう}であり、願いが満たされていない。しかし、それは名号の責任、如来の責任ではない。衆生の側に責任がある、と曇鸞は言います。ど

ういう責任かというときに、信心の問題だと言うのです。

信心という問題はやっかいで、なかなかわからないのですけれども、悟りということが、仏教一般を成り立たせてきた一つの大きな言葉であるし、目標である。そういう、悟りというものが中心の宗教とは、現世に、自分の体験内に、無限と一つとなる体験をもつということです。ところが、悩み多き、欲多き、しがらみ多き生活をしながら、そういう体験をもつことは、ほとんど不可能である。

それに対して、親鸞という人は、愚かであり、流転^{るてん}の生活をしていくしかないような人間、その人間が、本願によって、そこに、その生活のままに、悟りと同じ利益^{りやく}を得ると。だが、それは悟りではない。それを言い表す言葉は、言うならば、ないのだらうと思うのですが、それを、「聞其名号^{もんこみょうごう} 信心^{しんじん}歓喜^{かんぎ}」という『無量寿経』の言葉、つまり、「信心歓喜」という言葉のなかに見いだした。それは普通の、いわゆる信心ではない。普通言われるような信心というのは、自分に都合のよいことを宗教から取ってくるというかたちの、利用、依頼心があるのでしょうか。それは生死^{せいし}の問題と自分の力を超えたもの、運命的なもの、それが自分に加勢するようにはたらいてほしいと頼む。自分を超えたような何かに頼む。言うならば、自分のエゴを消さずして、自分のなかに無限なるものを取り込もうという、そういう宗教との関わりです。

■ 臨終まづべからず

ところが仏陀は、そういうものに依らない智慧というものを開くために苦勞された。そうい

う智慧は、一切衆生がその法に依って、その道理、真理に依ってたすかるものだと宣言された。それを、親鸞は求め求めて、本願の仏教で本当に出遇った。たすからない人間であるということ、もう、骨身に浸みて知っていて、しかも、たすかるという道を親鸞という人は発見した。これは、すごいことだと思うのです。

ではそれを、どういうふうに表示していくのかというときに、おそらく親鸞聖人も随分苦労されたと思うのです。言い過ぎれば、誤解される。言わなければ、せっかく本願に触れた歎びというもの伝わらない。せっかく飲んでいるのに、“やはり、救いは死んでから後か”というような話になったら、何のために、いま出遇っているのだと。いま念仏しておいて、貯めておいて、臨終に役立つぞというような、そんな根性で称えているのかと。そうではないのです。

親鸞聖人が、一念一念信心歓喜しているということは、その信心歓喜に救いがあるのです。その救いの意味は、「回向」でしょう。如来回向。如来が来てくださるのだと。無限は、有限の外にあるように見えるけれど、外ではない。有限を包んで、ここにはたらいっているのだということが、回向ということです。

その構造が難しいですね。真実信心と大涅槃のさとりととは、直に接している。接しているけれど、取り込んではないという関係で、いまを飲んでいけるということをどういうふうに言えるのか。ここを、親鸞聖人は、分限を押さえながら、しかし、あまり遠慮せずに積極的に言おうと。浄土教と言えば、死んでから後だというふうに思われているけれど、救いは死んでから後ではない。救いは現在にあり、臨終まっぴからず（「臨終の称念をまっぴからず」『尊号真像銘文』）、臨終が勝負だという宗教ではないのだと。

■ 清沢満之の言葉

では、いま、たすかったのならば、いま、お前は仏かと。そういう意味ではない。仏ではない。けれども、仏になる資格はあるのだと言うのです。資格があればそれでよい。仏になると

がんばらなくても、もうよいのだと。愚かで罪深い、哀しい身であるけれど、そのままに、無限なる慈悲が、ここにはたらいてきているという事実をいただければよいと。

これが、清沢満之先生の次の言葉（「臘扇記」）にもよく出ています。「請う勿れ、求むる勿れ、汝何の不足かある。若し不足ありと思わば是れ汝の不信にあらずや」と。こう言わざるを得ないのは、やはり、欲しい、求めるといふ心が湧いてくるからです。けれども、それを「不信」と言っているのです。如来に対する絶対の信頼がないと。それは、如来に対しての反逆ではないかと。けれども、如来は衆生のそういう反逆も罪も、全部許そうと。しかし、「汝の苦悩を如何せん」。そうやって、一人でもがいているものを救うことはできないよと。勝手にもがいているのだよと。こういう表現です。

信ずるということは、眼の転換を言っているのです。私どもの発想の転換です。だから、こちらから信ずるのではない。如来回向の信心だと。如来から信じられていると。如来から与えられているということに、領くしかない。どういう状況だからだめだとか、どういう状況なら良いという話ではなくて、どういう状況であろうとも、状況を否定媒介にしながら、絶対満足をそこにいただくという、そういう智慧が、本願の智慧として教えられているのではないかと思うのです。（文責：親鸞仏教センター）

「親鸞思想の解明」のご案内

どなたでも聴講（無料）いただけます。なお、11月5日は、下田正弘氏（東京大学大学院助教授）、菅原伸郎氏（元朝日新聞芸芸部記者）をお招きし、「科学技術文明と現代の不安2—知によって覆い隠された世界と宗教—」と題したシンポジウムを開催します。

記

日時：2004年9月16日（休）午後6時30分～9時

10月15日（金） 同上

11月 5日（金）午後5時30分～9時

場所：有楽町・東京国際フォーラムGブロック

JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

— 現代と親鸞の研究会・第12回 —

現代の世界の問題をどう見るか

ジャーナリスト 筑 紫 哲 也



筑紫哲也 氏

2003年12月1日、ホテルニューオータニ（千代田区）において、ジャーナリストであり、早稲田大学大学院教授の筑紫哲也氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。

グローバル化の問題点を鋭く捉え、多元的な生き方を提唱する筑紫氏に、「現代の世界の問題をどう見るか」をテーマに語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ グローバル化を問う

— スローライフの提唱 —

9・11（2001年）のテロが起きた大きな背景に、アングロ・サクソンの民族的色彩が非常に強く出た、グローバル化というものがあったと思います。グローバル化は、資本主義の究極形で、キリスト教が非常に大きなファクターとなって生み出されました。それが、ものすごい勢いで世界を支配していくという流れに対して、イスラム教の世界から、一番暴力的なテロリズムというかたちの反応が起きたわけです。

グローバル化に反対することの中身はいろいろありますが、グローバル化を端的に言うと、「人」「モノ」「金」「情報」が、国境を越えて飛び交うという状況です。それを推進するために、ITを含めた、先端の科学技術が大きな貢献をしていくわけです。その先端技術の速さは、いろいろな部分で表現されていますが、例えば「食」です。食べるということにおいて、

まさに世界で、「ファーストフード」というものが速さを具現化してきました。これに対して、いま「スローフード」という運動が世界に広がっています。ここにもやはり、グローバリズムがめざしている、単一方向に進むということに対する、一つの異義申し立てがあると思います。

私が、「スローライフ」を提唱した大きな理由も、やはり9・11にあります。21世紀に、^{どうとう}滔々と一つの巨大な超帝国ができあがって、しかもグローバリゼーションがものすごい勢いで進められていくなかで、「私たちは、どうやって生きるのか」ということが問われる時代にいるわけです。その勢いに対して、デモを組織したり、あるいはイラクの派兵に反対するというような、いわゆるプロテスト（protest）、抗議するということが大事であることは確かです。

しかし、もう一つ大切なのは、プロテクト（protect）です。つまり、世のなかのさまざまな変化のなかで、それに流されないように、わが身を守るということも大事ではないかと思っています。

■ 自分たちで選ぶ大切さ

ところが、「ファーストがいけないから、スローなんだ」ということであれば、これは合わせ鏡に過ぎません。9・11というのは、ある意味で非常に似た者同士の争いだと思うのですが、その理由は、イスラム教世界とアメリカのぶつかり合いは、宗教が一神教であるだけではなく、似ているところがあるということです。イスラム教の原理主義者たちが、「自分たちに

正義があって、アメリカ帝国は悪だ」と言うのは、入れ替わっているだけの話です。ですから、「ファーストの反対が、スローだ」と言っているだけでは、単なる入れ替わりに過ぎないし、勝ち負けで言えば、はっきり言ってスローが負けます。

速くて悪いものの最たるものは、戦争でしょう。国際的に皆の意見を集約することなく、いきなり武力という手段で問題を解決しようとする。しかも戦争とは、敵が撃つ弾よりいかに速い弾を撃って相手を殺すかということです。これはまさに、「速さの悪さの権化」です。しかし、遅くて悪いものも結構あります。その最たるものは、日本のお役所仕事であるとか、日本におけるさまざまな改革もそうかもしれません。問題は、速くていいものは何か、あるいは遅くていいものは何なのかです。それを「自分たちが選び取ろう」ということを実践しているのが、スローライフです。

文明やさまざまな進歩の一番基本に、「それが、人間にとってどうであるのか」というおさえがなければ、それは人間が、進歩と言われることのなかで、逆に奴隷になっていくという仕組みでしかないだろうと思うのです。20世紀には、しばしばそういう部分がありました。戦後の日本の経済成長もそうです。確かに経済が、自分たちが生きるための良い条件を整える手段として必要なことは認めます。しかし、経済は目的であってはならないはずなのに、いつの間にか目的になり、奴隷になってしまいました。

■ 仏教の果たす役割

私は、仏教がこれから大きな役割を果たせるのではないかと考えるようになりました。それは、一つには仏教が多元主義であるということです。

『仏教が好き！』（河合隼雄、中沢新一共著 朝日新聞社）という本がありますが、この本で一番言いたいことは、仏教は「メタ宗教」（宗教を超えた宗教）ということです。世界の宗教が、ある種の限界をもったり特殊性をもつ、

「そういう宗教を超えて、ある共通の普遍性をもち得る宗教がこれから先にあるとすれば、それは仏教であろう」ということだと思います。

仏教と他の一神教は何が違うかというときに、まさに「非対称」の問題があると思います。ユダヤ教もキリスト教もイスラム教も、神と人とはまったく別の存在であって、人間がどんなに努力しても神にはなれないという前提の、非対称のなかで成り立っています。仏教では、例えば「師弟同一」というように、「ある境地に達するとだれでも仏になれる」ということで、仏教だけが、対称的な関係を認めていますね。

グローバル化や超帝国というものが、世界で圧倒的な力をもつ時代に、これからの仏教の果たす役割は、とても大きいのではないかと感じています。（文責：親鸞仏教センター）

※筑紫哲也氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第7号（2004年12月1日号）に掲載予定です。

筑紫 哲也（ちくし てつや）ジャーナリスト、ニュースキャスター、早稲田大学大学院教授

1935年、大分県生まれ。59年、早稲田大学政治経済学部卒業後、朝日新聞社入社。支局勤務を経て、東京本社政治部記者、米軍統治下の沖縄特派員、ワシントン特派員、外報部次長、「朝日ジャーナル」編集長などを務める。89年、朝日新聞社を退社。同年10月からTBS系テレビ「筑紫哲也 NEWS 23」のメインキャスター。2003年より、早稲田大学大学院公共経営研究科教授。著書に『ニュースキャスター』（集英社）、『情報は誰のものか』『メディアの内と外』（以上、共著、岩波書店）、『この「くに」のゆくえ』『この「くに」の冒険』『乱世を生きよ』（以上、日本経済新聞社）、『総理大臣の犯罪』（サイマル出版会）など多数。また、『アンジャリ』（親鸞仏教センター）創刊号に「21世紀の家族」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」（千代田区の「ホテルニューオータニ」で）

ゆみを遼遠^{りょうおん}の洛陽^{らくよう}にはげまし、

信をひとつにして心を当来^{ほうど}の報土

にかけしともがらは、同時に御意^{ごい}

趣^{しゆ}をうけたまわりしかども、その

ひとつにとともに念仏もうさ

る老若^{ろうじやく}、そのかずをしらずお

わしますなかに、上人^{しょうにん}のおおせ

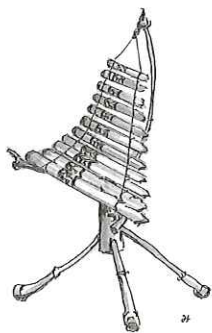
にあらざる異義^{いぎ}どもを、近来はお

おくおおせられおうてそうろうよ

し、つたえうけたまわる。いわれ

なき条々の子細^{こさい}のこと。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)



る明るい真実の世界を生きたいと願った人々は、同じときに聖人から本願の御ころをお聞かせいただいた。その人々に従って念仏に生きている老若男女は、数えることもできないほどたくさんいらっしゃる。しかし、最近ではそのなかに聖人の教えとは異なった諸説を唱える人々がいると伝え聞いている。それらは、まったく根拠のない主張である。詳しく問題点を吟味してみよう。

語 註

①【義】「御消息集^{ごしきしゅう}」には、「義と申すことは、行者のおおののからはかう事を義とは申すなり」

(『真宗聖典』五八九頁)、「義とも申すことは、自力^{じりき}のひとはからいをもうすなり」(同五八二頁)とある。

②【不可称不可説】『一念多念文意^{いちねんたねんもんい}』には、左訓として、「不可称」に「コトバモオヨバズトナリ」、

「不可説」に「トキツクスベカラズトナリ」とある。

③【おおせそうらいき】『歎異抄』第三条とこの箇所には、「おおせそうらいき」とある。この主語について、法然か親鸞かという議論がある。ここでは、唯円が聞きとった親鸞の言葉と了解した。

(訳・語註…親鸞仏教センター)

清沢満之特集号

『現代と親鸞』第6号を刊行

(9月1日)

このたび、研究誌『現代と親鸞』第6号Ⅱ写真が刊行されました。

本号では、研究論文として、「親鸞教学の法印―満之の信仰課題の展開―」(本多弘之所長)、「霊存としての自己―吾人の価値は如何―」(田村晃徳大谷大学講師、元研究員)、「内観の仏道―精神主義の現代的意義―」(藤原正寿研究員)。

また、「清沢満之研究会」から、今村仁司氏(東京経済大学教授)の「清沢満之における『宗教哲学骸骨』の思想的意義」、寺川俊昭氏(大谷大学名誉教授)の「道徳心と宗教的信念―清沢における哲学と宗教―」、藤田正勝氏(京都大学大学院教授)の「日本における西洋哲学の受容―清沢満之と大西祝―」の講義と質疑。

さらに、鼎談「信仰と理性―清沢満之は現代に何を語り得るか―」(今村仁司氏、東京大学大学院教授の竹内整一氏、本多弘之所長。司会…田村晃徳氏)を掲載しています。

なお、購読ご希望の方は、FAX・ハガキ・Eメールのいずれかで、親鸞仏教センターまでお申込みください(送料込で一冊千二百円、振込手数料は自己負担)。



『聖典』の試訳（現代語化）

第十条は、『歎異抄』の前編（師訓十か条）から、後編（異義八か条）への結節点であり、後編を貫く異義批判の要である。その要点が「念仏には無義をもって義とす」である。これは「念仏は人間の思慮分別を超えている」という趣旨である。

ところが、ここには人間の思慮分別を超えたものを、どうして人間が知り得るかという矛盾がある。人間には、ものごとを分別して認知し、認識するという知り方、つまり、わからないものを拒否し、わかるものだけを信ずる知り方がある。

だが、もうひとつ違った知り方がある。それは、わからないものをわからないものとして受容する知り方である。これは理性的な認識へ傾斜するのではなく、神秘的な認識へ傾斜するでもない。いわば、第三の知り方を『歎異抄』は「信心」という言葉で示している。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第十条〉

原文

「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」とおおせそうらいき。

そもそもかの御在生ざいしやうのむかし、おなじころざしにして、あ

現代語訳

「念仏は、人間を苦しめる偏った価値観による意味づけや考え方を破り、解放をもたらすところに来る意図がある。それは、言葉も及ばず、説き尽くすこともできず、考えることをも超えているからである」とおおせになりました。

親鸞聖人がご在世の頃、同じ志をもって、関東から京都まではるばる聖人を訪ね、また信心を同じくして、如来の大悲によって、いまここに開かれてく

親鸞仏教センターの動き

（2004・6～8）

■2004年

- 6・1 情報誌『Eclair』第7号、研究誌『現代と親鸞』第5号、機関紙『親鸞仏教センター通信』第10号を発行。
- 6・4 学会発表（伊東恵深研究員「『真仏土』所引『涅槃経』の文の意義―『乃至』された箇所を手がかりとして―・真宗連合学会・高田短期大学」）
- 6・7 第108回研究会（研究・交流・広報出版等の具体化に向けた協議と実働企画）
- 6・7 第44回聖典の試訳『歎異抄』研究会
- 6・7 第28回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 6・11 親鸞聖人ご命日のつどい
- 6・21 第45回英訳「教行信証」研究会
- 6・21 田村晃徳氏（大谷大学講師、元研究員）に真宗大谷派振興が授与される。論題「盛存としての人間」。
- 6・25 現代と親鸞の研究会⑨「日本の現状と宗教の可能性―超越性と現代の文学をめぐって―」文芸評論家・明治学院大学教授・加藤典洋氏（文京区・東京ガーデンバレス）
- 6・28 第21回清沢満之研究会
- 7・1 人事発令（中津功順研究員が再任）
- 7・9 親鸞聖人ご命日のつどい
- 7・11 学会発表（伊東恵深研究員「見仏性と顕仏性」・真宗大谷派教学大会・大谷大学）
- 8・1 人事発令（武田定光研究員、本多雅人研究員、越部良一研究員が再任。新たに岩海史研究員が発令）
- 8・4 第29回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
- 8・6 親鸞聖人ご命日のつどい
- 8・30 現代と親鸞の研究会⑩「現代の闇を破りうるか」作家・青木新門氏（文京区・東京ガーデンバレス）
- 9・1 人事発令（常規聴講研究員が再任）

研究誌『現代と親鸞』（清沢満之特集号）第6号、『親鸞仏教センター通信』第11号を発行。

現代における人間像に学ぶ研究会 ///

高岡 健氏にインタビュー

競争社会における現代人の苦悩と希望

聞き手：藤原正寿（親鸞仏教センター研究員）

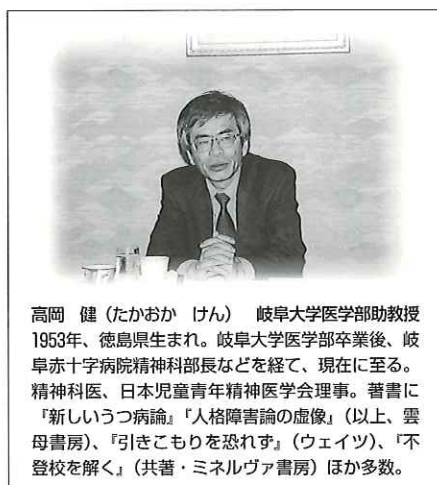
「現代における人間像に学ぶ研究会」は、現代の課題に真摯に取り組んでおられる方々に直接インタビューし、「現代の人間像」を学び、社会から要請されている親鸞仏教の課題を探ろうとするものである。その2回目は、2004年4月2日、東京ガーデンパレス（文京区）において、精神科医の高岡健氏をお招きし、うつ病をめぐって、現代の人間の苦悩と新しい生き方の発見について、お話をうかがった。ここに、その一部を紹介する。

■ 新自由主義とその問題点

——先生は、著書のなかで、現代の競争を原理とした「新自由主義」と、人間の苦悩は深く関わっているとおっしゃってられますが、その新自由主義について、またそこにある問題点などについてお聞かせください。

高岡 「新自由主義」とは、一言でいえば、政府を小さくしていく思想です。その結果、福祉あるいは教育を国家がフォローせずに、「それぞれ個人の責任ですよ」というふうに自己責任化するわけです。そうすると、活躍できる人にはチャンスがどんどん増えますが、何かのきっかけでチャンスから外れてしまった人には、敗者復活戦さえなかなかできないという世のなかになってしまいます。では、大きな政府をつくって、福祉や教育にどんどん力を入れていけばいいのかと言えば、一方で、国家予算がパンクしてしまうという矛盾が出てきます。

私は、そういう場合、常に考えなければならぬ原則は、それぞれの国のなかで生きている



高岡 健（たかおか けん） 岐阜大学医学部助教授
1953年、徳島県生まれ。岐阜大学医学部卒業後、岐阜赤十字病院精神科部長などを経て、現在に至る。精神科医、日本児童青年精神医学会理事。著書に『新しいうつ病論』『人格障害論の虚像』（以上、雲母書房）、『引きこもりを恐れず』（ウェイツ）、『不登校を解く』（共著・ミネルヴァ書房）ほか多数。

人びとの立場と言いますか、生きている人の視点に戻っていくということだと思っています。

医師である私の場合は、診察室に来られる方が中心ですから、どうしても患者さんを通して、人びとの生き方や感じ方を見ていくことになります。だから、「ごく限られた人を通しての考え方ではないか」と、おっしゃられればそのとおりなのですが、しかし、限られた人を通して見るだけであっても、普遍性に至ることができます。なぜかと言えば、病気というのは、体の病気でも心の病気でも、やはり世界の縮図であるからです。

だから、病気を通して世界を見る方法は、必ずしも外れたやり方ではなく、むしろ正しい結論へ至る一つの道筋であるというふうに思っています。そういう面から考えてみると、新自由主義の問題点がいくつか指摘できます。

一つには、すべて個人の責任に返してしまうことによって、その人に、より大きなプレッシャーを与えてしまうということです。体の病



気の場合で言えば、例えば、肥満やコレステロールに対して、“自己管理できない人は社会のなかで働く資格がない”という論調が、アメリカを中心に、いわゆる先進国のなかで広まりつつあります。でも、それは本当なのでしょうか。いろいろな検査結果から見ても、実は、肥満の基準については、はっきりしないことが多いのです。にもかかわらず、いかにも肥満が悪であるかのように吹聴されている。その本質は、“自分で自分を管理しなさい”“管理した証拠を数字で見せなさい”と言うところにあります。つまり、自己責任論がもたらす苦悩です。

——それは、うつ病についても同じことが言えるのでしょうか。

高岡 まったく質的には同じことなのです。軽症うつ病の場合ですと、周囲から見てもどこが辛いのが、よくわからない状態が多いのです。そうすると、うつ病のつらさに耐えて、そして組織のために働いている人が、まさに“自己管理のできている人”というふうに扱われがちです。

しかし、それに耐えられなくなってしまった人は、「新自由主義」を基準にして言えば、“だめな人間”なのです。だめな人間が復活していくための条件はただ一つで、「抗うつ剤を飲んで、元気を取り戻して、そして、また第一線に出て活躍しなさい」というかたちしかありません。まさに悪循環の連鎖を作り出してしまっているのです。私が、そういう方々を診てきて感じることは、もう、命がいくつあっても足りないんじゃないかということです。

■ うつ病の功罪

——先生の『新しいうつ病論』（雲母書房）という著書には、「絶望の中に見える希望」という副題がついていますが、うつ病ということの功罪についてお話いただけますか。

高岡 軽症うつ病というのは、自殺というかたちで命を落とす直前で、自分の生き方を変えする機会を与えられたことを意味する、という

ふうに考え直すことができると思います。企業のなかで闘いながら生きていくという生き方を離れて、逆に「私はこれまで、いったい誰のために働いてきたのだろうか」と、振り返ることができるための好機だと思うのです。

すると、例えば、それは社会の枠組みのなかで、他人から自分が優れているという評価を得たいというところに、大きな動機があったのではないかと振り返るゆとりが生まれます。それに対して、今度は、自分が自分を評価できるような生き方に転換していくことができるわけです。これが、うつ病の「功」の部分です。

しかし、逆にそれができずに、“自分はだめな人間だ”というふうに思い込んでしまって、とにかくだめじゃなくするために、より一層これまでの生き方を強めていこうとすれば、もう自殺しか残されていないというところに突き進んでいくことになります。そういう生き方をしていくとすれば、これが、うつ病の「罪」の部分になるでしょう。

確かにこれまでは、ある意味で、企業と二重写しにして生きていけば、それなりに満足できる人生が得られたわけです。それがバブル崩壊以降、まったくできなくなってきています。そういうときに、うつ病が起きやすくなります。しかし、これまでの自分と集団を二重に重ね合わせた生き方から、ほんの少しだけでも違った生き方へと転換させるための一つのサインだと考えることができれば、うつ病は、絶望ではなく希望になるだろうと思うのです。

※高岡 健氏のインタビューは、『現代と親鸞』第7号（2004年12月1日号）に掲載予定です。



高岡 健氏(左)からお話をうかがう(「東京ガーデンパレス」で)

● 清沢満之研究会報告 ●

有限と無限

大谷大学講師 田村晃徳



本紙第7号で報告のとおり、「清沢満之研究『宗教哲学骸骨』読解」と題した研究会を、2002年7月から毎月1回開催してきた。その後、通常の研究会に加え、2003年12月には、東京ガーデンパレス（文京区）において、「日本における西洋哲学の受容—清沢満之と大西祝一」と題して、京都大学大学院教授の藤田正勝氏をお招きした。また、2004年3月には、上野精養軒（台東区）において、鼎談「信仰と理性—清沢満之は現代に何を語り得るか—」と題して、東京経済大学教授の今村仁司氏、東京大学大学院教授の竹内整一氏をお招きし、親鸞仏教センター所長の本多弘之を交え、司会は田村晃徳が担当し、開催した。

今号では、それらの研究内容を紹介しつつ、第2回報告とする（出典は、『清沢満之全集』〈岩波書店〉とし、以下、巻数と頁数を記す）。



■ 「二大項」としての「有限無限」

『宗教哲学骸骨』第二章は、「有限無限」と題される（第1巻8～12頁参照）。この章の冒頭で、「有限無限」とは古来からの「思想の二大項」である、と清沢は述べる。つまり、思想史とは有限と無限の関係をいかに解するかについての歴史なのである。この際の有限、無限とはさまざまな言葉に置換できるであろう。それは人間と絶対者でもあり、世俗と永遠とも言い得る。いずれにせよ、この有限、無限とは清沢にとっても重要項であった。なぜならば、両者は清沢の宗教の定義となっているからである。清沢は、宗教を「有限無限の一致」であるとする。



藤田正勝氏を迎える研究会

鼎談の風景
(左から、田村、今村氏、竹内氏、本多所長)

よって、この第二章において有限と無限の関係を考察することは、清沢の宗教の定義において、不可欠の思想的作業であったのだ。

次に、第二章におけるもう一つの項目は、「有機組織論」である。これも、有限と無限の関係を考える上で、必然的な思索である。そこでは、有限同士の関係が述べられつつ、有限と無限のあり様が考察される。その結論として、「無数の有限は相寄りて無限の一体を成す」（同巻9頁）とされるのだが、この点について、「清沢満之研究会」で議論となった。仮に、有限が無数あつまっても、それは無限と同義なのか、という問いである。詳細はここでは述べられないが、清沢に関する研究書では、この問題点を補足する記述が「他力門哲学骸骨試稿」にあると言われていることだけを指

摘しておきたい（親鸞仏教センター主催の今村仁司氏をお迎えしての研究会でも、この点についての質疑応答があった。『現代と親鸞』第6号〈清沢満之特集号〉を参照いただきたい）。

■ 自覚の本体としての靈魂

第三章は、「靈魂論」が展開される（同巻12～16頁参照）。清沢は靈魂について、「靈魂有形説」「靈魂無形説」「靈魂自覚説」の三種を提示する。現代の靈魂についての理解は、「靈魂有形説」に近いであろう。それに対し、清沢が中心に据えるのは「靈魂自覚説」である。これは、人間の精神や意識は靈魂により統一されているとするものである。われわれは通常、五感を用いさまざまな知覚を得ている。それらが分散せず一つのまとまりとして、われわれに与えられるのは、それらの諸感覚を何かが統一しているからである。つまり、その統一させているものが靈魂なのだという理解である。

靈魂は、「宗教心の本体」であるともされ、別の著述では、宗教哲学を論じる者は、靈魂論を忘れてはならないとまで、清沢は強調する。靈魂論は、その後いくつかの変遷を経ながらも、清沢は「臘扇記」などでも言及している。その意味で、清沢において靈魂とは、欠かせない位置を有していたと言うべきであろう。

■ 大西祝との比較

2003年12月には、京都大学の藤田正勝氏をお迎えして、「日本における西洋哲学の受容—清沢満之と大西祝—」と題した講義をいただいた。藤田氏は、清沢満之と大西祝を比較しつつ、二人の仕事が領域的にも、果たした役割においても、共通点が多いことを指摘された上で、相違点を述べられた。それは、東大時代に清沢がフェノロサの影響の下、ヘーゲルやスペンサーに関心を示したのに対し、大西はブッセに学び、その影響からカントに強い関心を抱いた点である。そして何よりも、両者は仏教者とキリスト者という信仰の点で異なるという指摘で

あった。

清沢は、大西よりも1歳年長であり、その意味で、二人は全くの同時代人である。確かに大西の名は、現代ではそれほど知られているとは言えない。だが、清沢研究において、あるいは日本の哲学史の研究において、大西は重要な人物なのである。それは、西田幾多郎の言葉からもうかがえる。西田は、日本の思想界において「哲学研究者」ではなく、「哲学者」であると言うに値する人物として清沢と大西をあげたとされている（『現代と親鸞』第6号156頁）。この点からも、両者の思想史的位置が理解できるであろう。

■ 清沢における知と信の問題

2004年3月には、上野精義軒で東京経済大学教授の今村仁司氏、東京大学大学院教授の竹内整一氏、本多弘之親鸞仏教センター所長の鼎談が行われた。「信仰と理性—清沢満之は現代に何を語り得るか—」と題したこの鼎談では、主に『宗教哲学骸骨』を論点として、3時間を越す議論がなされた。そのなかでも、特に議論されたのが、清沢における「知」と「信」の問題であった。つまり、『宗教哲学骸骨』に代表される哲学的著作は、後の宗教的な著述にいかに関係しているのかという点である。

従来、清沢の研究においては、『宗教哲学骸骨』などの哲学的著作はそれほど取り上げられることはなかった。「哲学期」、「宗教期（信念期）」などと称されることもあるが、両者は断絶したもの、つまり前者の反省の結果、後者があるという理解が一般的であった。しかし、本当にそのように理解することが正当なのか。両者の関係は、従来思われているよりも連続性が見いだせるのではないか。そのような点について議論された。また、このほかにも鼎談者と清沢との出遇い、あるいは近代と超越の問題など、興味深い点について数多くの議論がなされた。鼎談の詳細は、『現代と親鸞』第6号〈清沢満之特集号〉に掲載される。是非お読みいただきたい。

（元親鸞仏教センター研究員）

第2回「親鸞仏教センターのつどい」を開催（4月22日）

親鸞仏教センターでは、去る4月22日、親鸞聖人の教えによって開かれる人間関係のつながりを求め、第2回「親鸞仏教センターのつどい」を開催した。第1部「おつとめ」は、センター仏間において勤行。第2部「講演と交流懇談会」は、会場を「学士会分館」（文京区・東大赤門隣）に移して開催した。「つどい」には、経済、教育、医学、法曹、科学、宗教、ジャーナリスト等、これまでにご縁をいただいた、首都圏で活躍の有識者など約60名が出席し、社会評論家の芹沢俊介氏（写真上）と本多弘之所長が、それぞれ「宗教と家族」の関係性について講演した。

芹沢氏は、「家族にとって、宗教とは」と題する講演で、家族が宗教を内に取り込んでいくありようを「家族エゴ」と抑え、文学作品や氏の宗教観などを交えながら、宗教との出会いを三段階（宗教を家族エゴに取り込む、家族エゴと宗教の共存、家族エゴが解体され宗教に包括されていく）で解き明かし、特に「『家族エゴ』が宗教によって解体され、同時に宗教のなかにすくい取られて眼が開かれ、人びとと共に生きるという、二重のテーマを親鸞の教えには見ることができるのではないか」と語られた。続いて本多所長は、「浄土と家族」と題して、宗教と家族の関係を、同じ志（願心）に生きるものを「眷属」とする『浄土論』を軸に考察し、「たとえ夫婦であっても本願がなければ他人である」と語られた安田理深氏の言葉を引きながら、「世間的な人間関係がなくても、同じ志があれば眷属たり得る。本当の家は、如来を生み出す浄土にあるのではないか」と述べた。

引き続いての交流懇談会では、下谷泰史（真宗大谷派参務）挨拶の後、脇本平也氏（国際宗教研究所理事長・東京大学名誉教授）から祝杯（写真下）の言葉をいただいた。また、センターの活動に対して、帯津良一氏（帯津三敬病院名誉院長）、丸井浩氏（東京大学大学院教授）、村山弘義氏（弁護士・元東京高等検察庁検事長）、由衛辰寿氏（朝日新聞記者）、青木新門氏（作家）、稲垣真澄氏（産経新聞編集委員）、頼住光子氏（お茶の水女子大学助教授）、佐藤裕美氏（日本生命保険顧問・元駐モロッコ大使）から、それぞれ激励の言葉をいただいた。

※講演録は、『現代と親鸞』第8号（2005年6月1日刊行）に掲載予定です。



親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

— 親鸞からあなたへのメッセージ —

あ と が き

親鸞仏教センターでは、カルト問題を一つのテーマに諸氏の執筆や講義をいただいていた。私たちがカルト問題に接するとき、「なぜ、そのようなカルト教団に入るのか」「その教団のカルト性を、なぜ見抜けなかったのか」、そして何より「なぜ、若者たちはカルト教団に惹かれるのか」などの問いが生まれてくる▼精神科医の高橋紳吾氏（東邦大学助教授・日本脱カルト研究会顧問）には、カルト問題を理論面と臨床面からお話いただき、その根底にある若者の不安を受け止めきれない現代社会の問題を提起いただいた。また、実際にカルト教団と関わりをもった医師の山藤純子氏（仮名）には、ご自身の体験と率直な思いを語っていただいた（共に、『現代と親鸞』第3号）。また、オウム真理教を巡る問題に関わって以来、若い人たちの生き方に関心をもたれたというジャーナリストの江川紹子氏には、「若者たちの心模様をどう考えるか」（『aňjali』第5号）を執筆いただいた▼そして、神学者の浅見定雄氏（東北学院大学名誉教授・日本脱カルト研究会代表理事）には、35年間にわたってカルト問題（氏は、カルトの公理を「必ずマインドコントロールを使う」とされる）に関わってこられた立場から、「カルトの予防と宗教教育」について講義をいただいた。氏は、オウム事件の被告との度々の面会を通して、また、カルト教団の元信者や家族の証言も交えながら、カルトの現場から、「巧妙な勧誘の手口」「入信に気づいたとき」「本人との交流」「脱会に至るまで」「脱会後のケア」など、弁護士や心理カウンセラーとの苦闘や、望

●新スタッフの紹介

嘱託研究員 ^{かきみ} 高 ^{ひろ} 海 ^し 史

1971年生まれ。慶應義塾大学環境情報学部環境情報学科卒業。大谷大学大学院文学研究科修士課程修了（真宗学）。

ましい宗教教育のあり方についてお話をいただいた（『現代と親鸞』第5号）。また、カルトの「予防」について二つを挙げ、「どんな誘いであっても、『あなたについて行けば、私は最後に何をさせられているのか』と、最初期の段階で尋ねることが大事である」ということ。もう一つは、「その場ではすぐに決めないで、『今日、街頭でこういう誘いを受けた』と家族や友人に語ることにしよう。すると、『それ、やばいんじゃないの?』とか『それ、A教団じゃないの?』と言ってくれる人が、必ず身近にいます」と▼前述の山藤氏は、「人生の目的や本当の自分を探していた」と、誰もが実感するような入信の動機を振り返る。その背景には、人間同志が生きながらも、家族の問題、社会への不満、将来への不安など、現代の索漠とした人間不信に覆われている社会の現実がある。だからこそ、悩みが表現でき、親しく信頼し合えてお互いが共に生き合うという、そういう「つながり」や「連帯」が強く求められていることを思う▼親鸞聖人は、「本願を信じて生きることは、日々むなく過ぎていく人生が転じられることである」と教える。それは、生きる意味の喪失から、すべての人を支えている大地に気づき、生きることに新たに意味が与えられた、転換した人生の感動表現であろう。しかし、その親鸞聖人の教えが伝えられていない現状を目の当たりにするとき、慚愧の念に耐えない。そして同時に、親鸞聖人の教えを現代に発信しようという、使命と責務を強く感じるのである。（長谷岡）